

フラれ侍

定廻り同心と首打ち人の捕り物控

二上 圓 Madoka Hutagami



アルファポリス文庫

<http://www.alphapolis.co.jp/>

目次

フラれ侍

5

薄緑

85

雛と狼

183

雪代

311

フ
ラ
れ
侍

〈一〉

——傘をお届けにまいりました！

——ありがとうございます。貴方様のお父様は本当に丁寧な良いお仕事をなさる。今、お茶をお持ちします。どうぞ、ゆっくりしてってくださいませ。

ね、玄乃介様？

卍

「実は折り入ってお頼みしたいことがあるんです」

深川は菊川町の裏店うらだな。その風のよく通る座敷で、この家の主あるじ、常磐津の師匠・文字梅ふみはこう切り出した。常磐津は当代人気の三味線の一流派である。

「ほう！ お師匠さんの頼みとあっちゃあ無下むげにはできねえ。聞こうじゃないか。言ってみねえ」

即座に安請やすひねけ合いしたのは南町定廻り同心・黒沼久馬くろぬまきゆうまだ。傍らの首打ち人——正式な役名は御様御用、山田浅右衛門やまだあさえもんも口を引き結んで静かに頷いた。

さて。同心と首打ち人が並んで座していることについて、少々説明が必要かもしれない。

そもそも罪人の首を打つのは町奉行所の駆け出し同心の仕事だった。とはいえ、江戸幕府が開かれ、既に二百有余年経っている。長く続く天下太平の世では、一度も刀を抜くことなく生涯を終える武士も多かった。そして一刀のもと首を斬り落とすのは生半可な技量ではできない。そこで、いつからか同心たちは斬首を山田家に依頼するようになった。

そうして自分の番が巡ってきた際、わざわざ浅右衛門のもとへ挨拶に行つて、すっかり彼の技と人柄に惚れこんだのがこの黒沼久馬なのだ。以来、ことあるごとにまわりついでいる。

尤も、当初、同心と首打ち人が連れ立って歩く姿を奇異に感じる江戸っ子は多かった。何しろ二人は背格好と年齢はほぼ同じだが見た目は甚だ違っている。久馬は剣の

腕はからつきしながら、外見も中身も明朗闊達、粹な細作りの小銀杏髻と巻羽織がよく似合う、絵に描いたような同心だ。片や総髪、黒羽二重の浅右衛門は寡黙で、双眸に凄味がある。

「ホラ、俗に言う『馬が合った』というやつさ」

出会った頃、二人の関わりについて久馬が言及したことがある。

「一目で俺は悟ったね。浅さんこそ、無一の親友、まさに俺の名の通り、俺たちは久馬の友なのさ」

浅右衛門は即座に間違いを訂正した。

「久さん、それを言うなら『竹馬の友』だ」

「チェ、聞き流せよ。そのくらい知ってらあ。洒落だよ洒落。それにさ、浅さんだつて俺のことをコンコンチキって言ってるじゃないか」

「……ひよつとして、それは知己では？」

知己とは己を知る——漢語表現で親友の意である。指摘されて恥じ入るかと思いきや、久馬は胸を張って言つてのけた。

「まあいいつてことよ、気にするな。コンコンチキの狐だろうと、竹馬の馬だろうとはたまたま孤高の狼だろうと、俺は構やしねえ。浅さんとならこんな風に毎日楽しい付

き合いができるんだからよ」

「——」

自分と居て、楽しいと言つてくれる人が現れるとは……！

十二の歳から罪人の首を斬つてきた、陰では〈首斬り浅右衛門〉と恐れられる山田浅右衛門には信じられないことだった。

それから数年が経つ今、浅右衛門は思っている。自分も楽しいのだ、と。

実際、この型破りな同心に引つ張り回されている内に首打ち人は知り合いが増え、世間が広がった。そういうわけ——

定廻りと首打ち人が小粋な細格子造りの町屋に並んで座り、いかにも婀娜っぽい常磐津の師匠の頼み事を揃って聞いていても、なんの不思議もないのだ。

「頼みというのは他でもございませぬ。弟の竹太郎のことなんですよ。最近、連日、吉原で見かけたと人伝に聞きました」

いえね、と文字梅は濃い緑のよろけ縞の袖を振る。帯は鳥の子色の流水紋、揺れる根付の水晶玉も涼しげな夏の装いだ。

「私も野暮は言いたかありませんし、自分の稼ぎで好き勝手するのに口を挟むつもりは毛頭ございせん。ただ、弟はお二人もご存知の通り、目明しの父の仕事を引き継ぐ

でもなし、フラフラ遊び歩いている半人前の身。この上、吉原通いに耽るなんざあ姉として、いやさ、人として許せませんのさ」

「——だから、人格者である俺と浅さんに連れ戻して説教してほしい、か」

翌朝。久馬と浅右衛門は文字梅の頼みに応えるべく問題の場所に向かっていた。

「そもそも未だまっとうなハナシ一つ書けたためしのない見習い戯作者のくせして、連日の北国通いと羨ま……じゃない、ふてえ野郎だ、キノコのヤツめ」

キノコとは文字梅の弟、竹太郎のことだ。筆名の朽木思惟竹から、久馬は面白がつてこう呼んでいる。

言うまでもなく、二人が目指す吉原は、幕府公認の遊郭である。

元々は日本橋近くにあったのだが明暦の大火事（一六五七）後、浅草寺裏の日本堤下に移動した。それ故（新吉原）とも称される。総面積は現在の尺度に換算すると約七千平方メートルという。

新吉原への行き方は主に二通りあった。浅草寺の裏手から日本堤をひたすら歩く。でなければ、神田川沿いに並ぶ舟宿で猪牙船を仕立てて日本堤まで。その後は駕籠で大門へ続く坂を揺られていく。大店の旦那衆や富貴な粋人は後者を採った。勿論、定

廻りと首打ち人の二人は徒歩である。昨夜の雨で洗い流されたような真つ青な空の下、燕がスイスイ二人を追い越していった。

「金をかければいいってもんじゃない。敵娼の顔を睨に思い起こしながらテクテク歩くのこそ粹ってもんだ、なあ浅さん？」

敵娼どころか、通ったことすらなくせに——などという意地悪は言わない浅右衛門だった。笑いを噛み殺して相槌を打つ。

「まったくさ。『野暮なこと 何処へおいでと 土手で云い』と言うからな」

これは日本堤を歩いている男は皆、吉原通いだと茶化している川柳だ。

「お、いいねえ。俺だつてその手の、吉原に纏わる句ならヤマほど知ってるぜ。例の見返り柳とかな……」

久馬が言っているのは日本堤近くにある柳のこと。後朝の朝、別れてきた花魁を思つて振り返る辺りにちょうど植わっているから、こう呼ばれるのだ。

「まさに『もてたヤツ ばかり見返る 柳かな』だよな？ わかるわかる、花魁に邪険にされたらとても見返りたいとは思わねえからなあ」

若い二人の足は速い。日本堤から緩やかに傾斜する衣紋坂を下り、茶屋の立ち並ぶ門前の五十間道を抜ける。

「チキシヨウメ！ この辺り、道の名から何から艶っぽいや」

いちいち感心する久馬だった。衣紋坂は行き帰りで乱れた衣紋（着物）を整えるので付いた名だし、五十間道は大門までの最後の行程の距離を表している。まさに（日本から 極楽僅か 五十間）（極楽と この世の間が 五十間）だ。

遂に二人は乳鋌を打った巖めしい黒塗りの大門の前へ至った。と――

「いたー いやがった、あそこだ！ おいら、キノコー！」

大門前の大通り、仲之町通りで早くもキノコこと筆名・朽木思惟竹、本名・竹太郎を発見。常磐津のお師匠文字梅の弟で御用聞き（曲木の松）松兵衛親分の息子である。「面白くもねえ！ もっと中にいやがれてんだ！ せっかくこの機会に吉原中じつくり見て回るつもりだったのによ」

「……久さん、心の声がダダ漏れだぞ」

久馬が嘆くのも無理はない。仲之町は前述したように吉原の真ん中をぶち抜いている目抜き通りだ。桜の季節には桜の木が植えられて、お江戸の花見の名所の一つになる。この時はやはり女子供も通行自由で、人がどっと押し寄せて花見を楽しんだ。歌川貞の（北廓月の夜桜）がその光景を巧みに描いている。また、今まさに久馬と浅右衛門が目になっている大門からの眺めは、歌川広重の（名所江戸百景）の一枚、（廓

中東雲）が見事にその風情を現代に伝えていた。

「だから、誤解なんでさあ！ たく姉貴ときたら早合点もいいとこだ」

とりあえず大門から引きずり出して収まった門前、五十間町の茶屋の座敷。同心と首打ち人の前で、竹太郎は憤って大きく首を振った。

「わっちが最近あそこへ入り浸ってるのには理由がある。戯作のためなんでさ。何としてもフラレ侍に会いたいと思いやしてね」

これには久馬も浅右衛門も鸚鵡返しに、

「フラレ侍？」

「あれれ？ 黒沼の旦那も、山田様もご存知ない？」

では、この思惟竹がご説明いたしましょう、と自称戯作者は茶で喉を潤すと六弥太格子の袖をまくって話し始めた。

「東西、とーざい！」

以下は竹太郎の語りである。

……ここ吉原で最近、（フラレ侍）というのが話題になっている。

このお武家、ある日、晴れだというのに傘を小脇に挟んでやって来た。吉原中を巡

り、とある遊女を見初めて一軒の廓に上がり、帰る際、雨が降っているというのに傘を差さない。来た時同様、小脇に挟んで歩き出した。その姿を奇妙に思った店の男衆が、若様、何故、傘を差さないのかと問うと、侍はしとどに濡れながらこう言った。

『私は思いを遂げていない。だから、フラれていくさ』

「くーっ！ 粹だねえ！ どうです、黒沼の旦那？ 山田様？ 己が恋した敵娼がシンから惚れてくれるまで傘は差さねえというわけさね」

話し終えた竹太郎は威勢よく両手を打ち鳴らす。

「この話を聞いて、わっちは『これだ！』と思いましたがね。このネタ、誰あろう、この朽木思惟竹が見事に名作に仕立ててみせる。だが、そのためには、ぜひ本人に会ってもう少し詳しく事のあらましを聞いてみたい——」

楽しみにしていた吉原探訪が露と消えた久馬は、不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「ふん、それで吉原へ日参していたと？」

「で、フラレ侍には会えたのかい、竹さん？」

浅右衛門の問いに竹太郎は鱗背に結った本多髻に手をやって、大きく息を吐く。

「いえ、それがまだなんで。だからこうして通い続けているんでさあ。それも方が一

にも見逃さないよう大門前で見張っていたわけでした」

「黒沼の旦那！ 大変だ！」

ここで飛び込んだのは久間の父の代からの目明し、〈曲木の松〉こと松兵衛親分。お江戸八百八町を走り回っており、何処にいても久馬を必ず見つけてこういう図になる。ちなみに、曲木は、柱にやならない……いつ何時も、走らにやならない。松親分……という洒落から付いた江戸っ子好みの綽名だ。

「おっと、山田様もご一緒で。ほんにお神酒徳利、お仲のよろしいこつて——と、あ！ てめえ、竹？ ここで会ったが百年目！ お梅に聞いたぞ、スネ鬻りの分際で吉原に通い詰めだそうだな？ 一体どんな了見で——」

「いけねえ、親父だ。相手をすると長くなる。じゃ、わっちはこれにて——」

「あ、逃げるか、待ちやがれ！」

久馬が割って入る。

「まあまあ、松親分、それより何でえ？ 事件かい？」

「あんの野郎、逃げ足だけは速えな。誰に似やがった——」

歯噛みした後で我に返った曲木の松、クルリと向き直った。

「そうでやした。殺しです。見事にスパッとやられた死体がめっちゃったんでさ」

場所は柳橋の川岸だという。

「何？ 柳橋だ？ ちようどいいや、新吉原なら土手八丁から山谷船が通ってる。飛び乗って行くや、さあ、浅さん！」

「う、うむ……」

例のごとく、浅右衛門を急ぎ立てて松兵衛の先導のもと久馬は現場に急行した。

〈二〉

殺しのあつたという柳橋から浅草橋界隈は神田川の岸边に当たり、舟宿が軒を連ねている。大店の主や富貴な粹人はここから舟を仕立てた。神田川から大川（隅田川）へ漕ぎ出し上流へ上つて山谷堀に入り、日本堤の土手で舟を下りて駕籠で吉原を目指すのだ。駕籠に乗り換えるのは風情を求めるときばかりではない。山谷堀は大川との合流地点こそ広いが、そこから先は急激に狭くなっていて舟ではこれ以上遡れないからだ。今、久馬と浅右衛門は吉原詣での逆の道筋を辿っていた。

「やっぱり猪牙舟は速えや！ なあ浅さん！」

猪牙舟は櫓が後ろにある伝馬船でお江戸最速の船である。山谷堀から柳橋の舟宿まで一艘百四十八文。これが屋根船となると倍の三百文になる。

昨夜の雨を集めて大川がキラキラ輝いていた。あつという間に柳橋に着く。

櫓から竿に持ち替えた船頭が見事な竿さばきで船を棧橋に寄せる。そのすぐ近く、船宿と船宿の間の空き地で物見高い江戸っ子たちが屍骸を囲んでいた。松兵衛は人垣をちやっつちやと割って進む。

「はい、道を開けた、開けた——同心様がお着きだぜ」

筵を剥いで開口一番、久馬が訊いた。

「身元は？」

「まだわからないんです」

「ふむ？ ぐっしより濡れてるな？ ということはやられたのは昨日の夜半か……」

思い出して久馬が言う。

「昨夜はずっと雨だったからな」

死体を検めながら更に続ける。

「下馬を着るところをみると、こりや遊び人だな」

下馬は襦袢代わりに着る浴衣の一種でやくざ者が好んだ。堅気の間人はこういう着

方はしなかった。

「そういやあ、この前の殺し——三日前に浅草寺裏の田んぼでめったかったアレもまだ身元がわからないままだったな、親分？」

「へえ、面目ねえこつて」

松兵衛は半白の鬢をしきりに搔きつつ、

「あつちは身なりが上等な羽振りの良い町人風だったんで、サクツと身元が割れるかと思つたんですがね。身内がいらないのか、いまだに名乗り出てくる者がいねえ」

「あれも、死体が濡れてたなあ？」

「そうでした。でも、そのこと自体はフシギじゃありませんや。走り梅雨つてやつで、ここんところ雨の日が多いですからねえ。特に夜半は」

浅右衛門が周辺の草叢を歩き回っているのに気づいて、久馬が声をかける。

「どうした、浅さん？」

「いや何、さっきの竹さんの話のせいかな」

首打ち人はボソリと呟いた。

「傘が何処かに転がってないかと、ふと気になって——」

「あ、そうか！」

浅右衛門の疑問を久馬が引き継ぐ。

「雨の夜に襲われたなら、そこらへんに傘が落ちてて当然なものな」

「十中八九ありやせんよ」

即座に首を振る老親分。

「おい、そりやどういう意味だ、松？」

「へえ。傘が道に落ちてたら、通りかかった者が拾って帰るでしょうからねえ」

そう言つて、やや皮肉っぽく言い添える。

「関わりたくねえから死体は見てみぬふりをしてね」

松兵衛の言葉に久馬も浅右衛門も首を傾げた。それに気づいて松兵衛が早口に説明する。

「黒沼の旦那も山田様もピンと来ないかもしれないやせんが傘は新品なら二百文から三百文はしやす。庶民には高根の花でさあ。その証拠に、越後屋で着物を誂える連中でさえ傘は返さないんですから」

江戸一の呉服屋である越後屋は、宣伝も兼ねて雨の日の来店客に屋号を入れた傘を貸し出している。それを返却せずにそのまま使い倒す人が多かった。川柳に残る（古傘に いつも越後が 二、三本）はこれを言っている。

「……ふーん、そういうわけか」

「さいで。町人ならさほど悪気なく落ちてた傘を拾いやす」

「だがよ」

久馬が視線を死体に戻した。

「持ち主がこんな風にザツクリやられてるんだぜ。傘だつてブチ壊れてるか血潮が飛んでいて綺麗なまんまのはずはない。そんな傘なら、いらねえだろう?」

松兵衛は優しく微笑んだ。

「いえいえ、骨が折れていようと、血まみれだろうとかまやしません——そのため古傘買いがいるわけだ」

お江戸は究極の再利用都市だったのだ。

古くなつた傘を下取りする（古傘買い）が始終市中を巡っていて、古傘は一本四文から十二文で買い取られた。回収された傘は古傘問屋へ集められ、ここから更に傘張り替え業者へ回される。折れた骨木を入れ替え、破れたり汚れている和紙は張り替えるのだ。この剥がした和紙の方も包み紙に再利用されたというから徹底している。

「へー！なるほどねえ！俺は気づかなかつたが傘つてやつはありがたくて価値のある代物なんだな。尤も、俺は傘は嫌いだ。だから持つたためしはないがよ」

「さすが黒沼の坊！見上げたお心掛けで！」

すかさず褒めちぎる曲木の松。

「これぞ同心の鑑！傘を持つてたんじゃあ、いざつていう時、刀が抜けやせんからね。お侍はそうでなくっちゃあ」

「え？違うよ、雨に濡れてる方が俺は絵になるからさ。これぞ、水も滴る良い男つてね。なあ、浅さん！」

これには苦笑するしかない浅右衛門だった。

その夜。竹太郎の吉原通いの真相を引つ提げて二人は文字梅の家を訪れた。感謝の手料理でもてなされたのは言うまでもない。

「本当にお世話をおかけしました、黒沼の旦那様、山田様。戯作のためと聞いて私も安心いたしました。どうぞ、何もありませんがゆつくりしていっておくんさい」

「芝海老の乾し煎り、きんぴら、ほう！渦巻豆腐とは気合が入つてるな、文字梅！」

「フフフ、旦那の好物の卵ふわふわも、ちゃんとして用意してござんす」

しかし、賑やかに並んだ皿を前に、いつにも増して口数の少ない浅右衛門に久馬は気づいた。

「なんだい、浅さん。何が一体そんなに気になるんだ？ 今日、殺しの件か？」
 「それもある。久さん、今日の仏、ありゃあ、かなりの手練れの仕業だぞ。肩口から一刀両断。微塵も迷いのない剣だ」

「やはりそうか。三日前の浅草寺裏のソレも俺が検視したんだが——あっちも、俺の目から見ても鮮やかな斬り口だった」

南町奉行所配下の定廻り同心・黒沼久馬の剣術が全く冴えないのは、本人も自覚しているところである。

「尤も、剣はヘツポコでも俺には推理の才がある。三日前のは身なりの良い小金持ちを狙った追剥ぎの仕業で、今日のはやくざ者同士の喧嘩というのが俺の結論さ」

「雨の夜に斬られた身元不明の二つの死体ですか？ おお、怖い」

剥身を交ぜた切干大根の小鉢と爛徳利を持って戻ってきた文字梅が、ブルツと肩を震わせる。

「ほつといて大丈夫なんですか？ 今また、雨が酷く降ってきましたよ。お二人ともお帰りは十分お気をつけくださいまし」

「アハハハ、俺たちが襲われるかよ。天下の定廻りと首打ち人だぞ。とはいえ——雨中の殺しが二度も続くと流石にいやあな気分だぜ」

久馬は咳払いをした。

「言うまでもなく、俺としてもこのまま見過ごすつもりはない。二人の身元——いやさ、どっちか一人でもいい。何処の誰か、一日でも早くはつきりさせたい。そこでだ、ぜひ力を貸してくれないか、浅さん？ 俺にはあんなの助けが必要だ」

率直で明朗な協力量請に浅右衛門は噴き出す。

「久さん、頼りにしてもらうのは光栄だが、俺も今回ばかりは腕の立つ人物に斬られた」ということ以外はわからない。特別気にかかる点も見当たらなかったし……」

自分が拘っている理由は、と浅右衛門は明かした。

「実はな、今日、松兵衛親分に傘の話聞いて——耳が痛かったよ。何故って、俺は今の今まで傘の事情について全くの無知同然だったからさ」

首打ち人は心から恥じ入っている。その様子を見て久馬はクスツと笑い、浅右衛門の盃になみなみと酒を注いだ。

「そういうところがいかにも浅さんだな！ よろず目利きは伊達じゃないや！」

山田家の斬首請負は副業にすぎない。本職は刀剣鑑定である。だが、専門の刀剣だけではなく、未知のモノはなんでも知ろうとするあくなき探求心がこの男にはある。わからないことに出会ったら徹底的に追求せずにはいられないのだ。こういうと

ころが凄いと久馬は思う。そうやって蓄積した知識が、他人を見下す尊大な態度や驕慢にならず、あの優しい静かな眼差しになるから不思議だ。

手酌した酒を喉を鳴らして飲み干すと、久馬は言った。

「そうか、浅さんは傘について興味がある、もつと知りたいというのだな。そういうことなら——どうだい、明日、一緒に照降町へ行ってみねえか？」

素晴らしい笑顔を友に向けて続ける。

「俺もよ、今、気づいたんだが、ひよつとして今回の〈雨の夜の殺し〉に繋がる血染めの傘なんぞが、あの町でならひよつこりめつかかるかもしれねえからよ」

浅右衛門はゆつくりと顔を上げた。

「照降町か……」

〈三〉

照降町は大伝馬町の南、堀江町三、四丁目の辺り——

日本橋北詰から江戸橋方向へ進むと荒布橋というのに突き当たる。ここを渡って親父

橋に至るまでの通りについた名だ。傘屋や、下駄、雪駄などの履物屋の店が並んでいる。

〈一町で 雨を泣いたり 笑ったり〉
雨が降れば傘屋が喜び、晴れてお天道様が照れば履物屋が喜ぶ。そのことを江戸つ子が面白がってつけた町名だ。元々は寛永三年頃、一軒の店が当時珍しかった傘と千利休の用いた庭下駄を売り出したら人気になり、同業者がどつと後に続いたのが始まりらしい。

「久さん、昨夜、お師匠さんの家から帰って、俺も家にある書物を漁って傘について多少は調べてみたんだが」
照降町への途上、魚河岸を歩きながら浅右衛門が言う。この日本橋から江戸橋の間の河岸、日本橋側の北岸は魚市場になっており朝はたいそう賑わう。ちなみにこの頃の江戸には〈一日千両〉と称された場所が三つあった。一日でそれだけの金が動くという意味だが、魚河岸は朝千両、歌舞伎小屋は昼千両、そして昨日、久馬と浅右衛門が足を運んだ吉原が夜千両である。

その魚河岸には、薄曇りの今日も大量の魚介類が荷揚げされ、威勢の良い取引の音が響いている。

「あの後？ ふえー、浅さんは書物を調べたのか？ 俺は、昨夜は文字梅の美味い手

料理と良い酒を飲んで、ぐっすり寝たよ」

「傘はその昔、仏教や漢字などと同じ頃に中国より伝来したそうだ。とはいえ平安の絵巻物にある傘は今の傘じゃなくて天蓋——貴人や偉い僧侶に差しかける日除けや魔除け、そして権威の象徴だった」

眠そうに目を擦っている同心に、首打ち人がいきなり訊いた。

「久さん、その時代の傘と今の傘の違いは何だと思っかね？」

「え？ え？ そりゃあ、えーと……」

「閉じられるかどうか、さ」

傘の開閉ができるようになったのは安土桃山の世からなのだと浅右衛門は教える。

「その後、傘は度々改良が加えられた。聞いているかい、久さん？」

「おうよ、聞いているともっ！」

「萬里亭蓼和撰の『俳諧職人尽』にも傘職人の句が載っていた。なかなかいい句も

あったぞ。聞きたいかい、久さん？」

「え？ あ、も、勿論だ」

「萬里亭本人の『五月雨や 雲かたづくや 日傘張り』、その他傘職人では『傘張りや 葉の花にまで 良い日向』……」

自らも和水の号を持つ浅右衛門。自然、和歌や俳句に心魅かれるようだ。

「傘張りの 眠り胡蝶の やどりかな」『傘張りや かがりも錦 ふゆもみじ』なんてえのは優美だな！ 『あぶら引き 傘の匂いや 草いきれ』……これは傘づくりの工程を巧みに読み込んでいる」

「ふあ〜〜あ」

遂に大あくびをして久馬は本音を漏らす。

「俺あ、やっぱり傘職人より吉原関係の艶っぽい句の方がいいや！」

そうこうするうちに荒布橋を二人は渡っていた。

「さあ、着いた！ ここが昭隆町だぜ！」

周囲を見回して久馬が訊く。

「さて、これからどうする？ 傘関係の店を一軒ずつ廻るかい？」

と、浅右衛門がスタスタと道の向こう側へ渡っていくではないか。その先にはしゃがみ込んで蠢いている子供たちの姿が見える。

「いもむしごろごろーひょうたんぽっくりこーこーこー」

近寄ると浅右衛門は声をかけた。

「みんな、せつかくの虫行列の道中に申し訳ない。チョット教えてくれないか？ こ

の辺りで一番新しい傘屋は何処だろう?」

〔芋虫ごろごろ〕に興じていた子供たちが顔を上げ、可愛らしい声が返ってきた。

「それなら、あそこ、日喜屋さんだよ、お侍さん!」

「日喜屋さんの傘は、下り物だからそりゃ人気だぜ!」

下り物とは上方から来た物品のことだ。江戸っ子はやたら上方のものをありがたがった。一方、上方伝来でないものはありがたくない、ぐだらないものだ。

「辰巳芸者の綺麗処も買いに來るってお父つっあんが言ってた!」

「日喜屋さんか、ありがとう!」

「へえー、俺はてつきり一番の老舗が何処か訊くかと思つたがよ」

しきりに感心する同心に首打ち人は微笑んで言う。

「いや、新しい店の方が柵がなくて、噂話も含め色々訊きやすいかと思つたまでさ」

「これはこれは! 日喜屋へようこそおいでやす!」

暖簾を潜つた途端、久馬の巻羽織を目ざとく見つけて大番頭が走り寄つて來た。

間口三間、堂々たる店構えである。

「同心様! ご妻女あるいは大切な御方への贈り物ですか?」

揉み手する大番頭に久馬の笑顔が弾ける。

「よくわかつたな、まあ、そんなところだ」

「まったく! こんな男前な同心様にお心を寄せられるとは、なんとお幸せな女子はんどつしやる! どうどす、これなど? 上方より取り寄せたばかりの最新の傘でございませう」

「おお! こりゃ凄いい! こんな傘は初めて見た。綺麗だなあ……!」

思わず声を上げる久馬。

「流石、お江戸の同心様、お目が高いどすな! これは蛇の目の中でも一番繊細で、かわい女子はんにもご負担のう扱える造りになっています。お色もお好みのものを選んでいただけるよう数多く揃えておりますので、どうぞお手に取りつてごらんください」

「うむ、俺も友人も無骨者で傘についてはよく知らぬのだ。この際だ、傘について詳しく教えてくれ。えーと、傘には女物と男物があるのか?」

上方出身の商人らしく、大番頭は如才なく説明し始める。

「へえ、当店で扱っている傘は主に番傘、蛇の目傘、端折傘とす」

端折傘は大型で柄が長く、野点などに使われる特殊な傘だと奥の柵を指差した後で、「こちらが番傘。一般に使用される頑丈な傘どすな。和紙も厚く骨も太い」

「ほう? 《守貞漫稿》に記された大黒傘とはその番傘をいうのか?」
 身を乗り出した浅右衛門に番頭は頷いた。

「さようで。お詳しいけどすな、お侍様。大黒屋は大坂にあった傘屋の草分けやそうで——残念ながら現在はそのうなつて、番傘の別名として名だけが残ったゆうことです」

大番頭は番傘が並ぶ一角から移動する。

「番傘もよろしおすが——やはり私はこちら、蛇の目をお勧めします。番傘よりも繊細で粋でつしやる? お似合いとすえ!」

蛇の目は細身で男女を問わず洒落者が好むと大番頭は言う。その分、値段も高いというわけだ。大番頭は小僧に運ばせた中から一本抜き取った。

「蛇の目はその名の通り、傘の中央部と端に青い土佐紙を張り、その中間に白い紙を用いて、開くと蛇の目みたいに見えるさかい、この名がついたそうどす。現在は和紙の張り方は色々で上方とお江戸の好みの違いもありますなあ」

大番頭はちよつと声を低めて、

「どうもお江戸のお人は単色を好まれるようで」

久馬は目を瞠った。

「へー、そうなのか? 傘一つとっても江戸と上方で好みが別れるとは面白いものだ

な!」

「フフ……同心様ほどの御方が御心を寄せる佳人なら、こんなお色はどうでつしやる?」

大番頭が選んで差し出した傘は翡翠色。柄の部分はしつとりとした黒塗りだ。

「どうどす? ここに女子はんの白い手が添えられて、『主様、雨が……』なんて差しかけられたら……」

「むむ、文字梅が……白い手で? そりゃたまらない」

久馬は叫んだ。

「か、買おうじゃねえか!」

「毎度おおきに!」

まんまと術中にはまり——否、江戸っ子らしく気風よく即決する久馬だった。

贈答品ということで、これまた上方風に藤色の薄紙で美しく包んでもらっている傍らで浅右衛門が尋ねる。

「それはそうと、大番頭さん、このお店は新しいな? 日喜屋という屋号は初めて聞く気がする。尤も最近この辺りに来なかつたせいかもしれないが」

お茶を差し出しながら、にこやかに大番頭が答えた。

「三年前、開店したばかりでございます。どうぞ、これを機に御贖肩に願います」

この日喜屋は京都烏丸からすまに本店があり、ここは江戸での最初の出店だと大番頭は誇らしげに法被はっぴの袖を揺らす。

「三年前、私が店を任されて江戸へ来ましたのや。おかげさまでようさん儲けさせてもらうて、このまま暖簾のれん分けしてもらえそうどす」

浅右衛門は興味深そうに店内を見回した。

「それにしても、こんないい立地がよく手に入ったな！」

「へえ。運が良かったんです。ちょうど廃業して売りに出されたばかりのお店みせがあり、渡りに船とばかり喜んで買い取らせていただきましたん。ご覧の通り立派な造作で、居抜きで買うてほとんど手も加えず、すぐに店開きできました」

「チエ、乗せられたかな？ 傘一本で五百文だけ。予定外の出費だ」

上方の美しい傘を肩に担いだ黒沼久馬、店を出るなりブツクリ頬を膨らます。

「だが、まあ、そんな傘をもらったら文字梅師匠、泣いて喜ぶぞ。久さんの株も一段と上がるうというものさ」

「やつぱり？ 浅さんもそう思うか？ へへへ、照れるぜ。フラれ侍ならず、俺はモテモテの天晴あっぱれ侍だな！」

これには浅右衛門、口の中で呟いた。

「やれやれ、それを言うなら照照侍あしあしだろうが」

「なんか言ったか、浅さん？」

「いや、何も」

その後、数件の傘屋を巡り、古傘屋も覗いたが、そう上手い具合に、血染めの傘は見つからない。

「同心様、血に汚れた怪しい傘なんぞ拾ったとしても、汚れた和紙は剥がして古傘屋に売るんじゃないでしょうかね？ 私どもは骨だけでも買いますからね」

などと呆れられる始末。

通りへ戻ると、道の角に白玉屋が屋台を出していた。

「ちようど小腹がすいたな。久さんは傘を買って散財したようだから、俺が奢おごるよ」

「お、いいねえ！」

屋台の親父はニコニコして二人を迎えた。

「こりゃあ助六すけろくか、はたまた斧貞九郎おのさだくろかと思紛まぎれましたぜ、八丁堀の旦那。傘がよくお似合いで。日喜屋さんでお買いになった？ さすが下り物だけあってあそこの傘は人気ですねえ！ しかし、以前の紅葉屋もみぢやさんもいい傘を揃えていたし、あんなに繁盛

していたのにねえ」

歌舞伎役者のようだと煽てられた久馬、大切そうに傘を小脇に抱える。

「紅葉屋たあ可愛らしい屋号だな！」

隣の浅右衛門がすかさず教えた。

「いや、久さん、昔は傘を紅葉傘と総称したから、そこから採った名だろうよ。古今集の歌からきているらしい。『雨降れば 笠取山の もみじ葉は 行きかう人の 袖ささぞ照る』……」

「浅さん、昨日は傘について無知だと嘆いていたのによ、今日はここ、照降町で傘屋がやれそうな勢いだぜ」

久馬の言葉に浅右衛門は頬を染めて目を伏せる。この男でも照れるのだ。慌てて話題を変える。

「紅葉屋さんというのかえ、日喜屋が居抜きで買い取ったという以前の傘屋は？」

屋台の親父は一瞬、ハツとした顔になり、改めて浅右衛門と久馬を交互に見た。

「旦那様方、まさか、御用のスジで来られたんですか？」

「違う違う！ 俺はコレにせがまれてさ。モテる男は辛いぜ」

小指を立て、次に傘を持ち上げて陽気に答える同心に、屋台の主も安心したようだ。

「でしようね！ それに紅葉屋が店を畳んだのは誰のせいでもない、自業自得なんだから、事件になんてなりようがない——」

冷水にさらされた白玉は見るからに涼しげで美味しそうだ。店主はすばやく椀に移すと、

「とはいえ、同情はしますがね。へい、お待ちどうさま！」

椀を受け取りながら浅右衛門が訊いた。

「ほう？ 店主が病でも患ったのか？」

「病になったのは女将さんの方。ポツクリ逝っちゃまって紅葉屋の主はソリヤア気抜けになった。オンドリ夫婦だったからねえ。だが、いけねえのはここからです。女房を失った寂しさを別のもので紛らわせようとした。コレですよ」

白玉屋は椀を持って壺を振る真似をした。久馬が顔を顰める。

「博打か」

「若え時まじめだった奴が、年取ってから覚えた遊びは危険とよく言いますが、まさかこれ。あれよあれよという間に身上を潰した。なんでもね、最初の内は同じ照降町の日向屋——これは下駄屋ですがね、その若旦那がこっそり金を貸してたそうで。それがとんでもない額になったらしい。大旦那に見つかって大騒動でしたよ」

首に巻いた手拭いで顔を拭くと、白玉屋の親父はしんみりした口調で言った。
 「結局、借金のカタに店は押さえられ、一人娘は苦界に入った。紅葉屋当人は娘が吉原に売り渡された夜に身を投げて、翌日、両国の百本杭に引つかかっているのがめったかった」

「そりゃ憐れな話だなあ」

白玉の甘さを噛みしめながら久馬がつくづくと息を吐く。

「人生てのは降る日もありや晴れる日もあるとは聞くがよ」

「こりゃいけねえ。せつかく綺麗な傘をお買いになったのに湿っぽい話をしてしまいました。申し訳ねえ」

「いいってことよ。気にするな」

ここで二人は背後に聞き覚えのある声を聞いた。

「黒沼の旦那！ 大変だ！」

息急ぎ切つて駆け寄つた曲木の松親分、一気にまくし立てた。

「またずぶ濡れの斬死体が見つかった！ 殺られたのは昨晩らしいや！」

〈四〉

驚く久馬と浅右衛門の前に、曲木の松は告げた。

「ほら、昨夜も雨が降つたでござんしょう？」

「なんだと？ クソツ、場所は何処だ？」

白玉を呑み下して久馬が前のめりになる。

「京橋川と三十間堀の——三ツ橋界限です。ふざけやがって八丁堀の御組屋敷に近い辺りですよ。亡骸の方は最初に駆けつけておいでの鳥住の旦那が検視を終えた後、番屋へ回す前に引き取られていきました」

「え？ ということは？」

「へい。今回は早い段階で身元が割れたんです。というのも、殺されたのはお武家様なんです。それも」

松兵衛はここでゴクリと唾を呑んでから、

「六百石の御旗本。向柳原の宇貝様の御三男で平三郎様という名だそうです」

とりあえず久馬は浅右衛門と三ツ橋の番屋へ向かった。検視をした同僚の同心がまだそこにいると聞いて、詳しい話を聞こうと思つたのだ。松兵衛の方は先の斬死体の

二人の身元を何としても割り出すと息まいて、砂埃とともに走り去った。

「そうさ、向柳原に屋敷を構えた宇貝外記様の御三男、平三郎殿。年齢は二十一。検査をしてる最中に屋敷の者が引き取りに駆けつけて来た」

番屋で洪茶を啜っていた定廻り同心、鳥住大吾はそう言つて笑つた。

「まあ、あのくらいのお歴々になると体面つてもがある。家人の話によると平三郎殿は桃井の道場に通つていたそうで、どうもその帰りに襲われたらしい」

「桃井？ つてことは〈士学館〉か？ あさり河岸にある？」

「そう。屍骸が見つかった場所が三ツ橋の白魚橋——」

〈士学館〉は安永二年（一七七三）、桃井春蔵が創建した鏡新明智流の道場で、齋藤弥九郎の神道無念流の〈練兵館〉、千葉周作の北辰一刀流〈玄武館〉とともに江戸三大道場に数えられる。幕末〈人斬り以蔵〉と恐れられた岡田以蔵も〈士学館〉の出だ。最初、道場は日本橋南茅場町にあったが二代目桃井直一が南八丁堀大富町に移した。そこがあさり河岸と呼ばれる一帯で、三つの橋がかかっていた。禅正橋、白魚橋、真福寺橋だ。

「傷はどんなでした？」

「これは山田殿……！」

幕府公認御様御用人、山田浅右衛門に声をかけられて鳥住は姿勢を正した。侍は皆山田浅右衛門を前にするとこのような態度となる。ただ一人の例外が久馬なのだ。

「鮮やかなものでした。こう、正面からの袈裟懸け。抜く間も与えなかつたらしい」
この定廻りは中々の遣い手で太刀筋を再現して見せてくれた。

〈士学館〉の門弟ならば襲われた宇貝平三郎もそれなりに腕に覚えはあつたはず。それをあそこまで見事に斬り殺しているんだから、内心、唸りましたよ」

久馬も唸つた。

「どうもわからねえ。裕福な町人、やくざ者、そしてお歴々の若様ときた。この三死体無関係のようできて共通するところもある。斬り口から見た、鮮やかな剣の腕……」

浅右衛門が言い添える。

「そしてもう一つ。襲われたのが、雨の夜……」

浅右衛門は久馬を隅に引つ張つてから言つた。

「久さん、俺はどうしても気にかかることがある。それを確認するためにその宇貝という旗本の屋敷へ行つてみたいのだが」

斬られた若侍、平三郎が住んでいた屋敷、六百石の宇貝家がある向柳原は、神田川を挟んで南側にある柳原に対してその向かいだからと付いた名だ。大名、旗本、御家人の武家屋敷が並んでいる地域である。町家の通りにある番屋の代わりに辻番所が設けられ、警備の下士が立っているのも物々しい。だが、一番の違いは行商人がやってこないこと。だからどの道筋も森閑しんかんとしている。

一緒にやって来た浅右衛門は宇貝家の長屋門の前で足を止めた。

「俺はここに残るから、後は久さん、頼んだぞ」

「おう、任せとけ！ 例の件を訊けばいいんだな？」

三男とはいえ、子息である。邸内は葬儀の準備などで騒然としていた。

「このたび平三郎様にあらせられましては、誠にご愁傷様でした——」

式台の前で仰々しく頭を下げる南町奉行配下の定廻り同心、黒沼久馬。応対に出てきた初老の用人に「何用か？」と問われると、一気に告げた。

「平三郎殿のご遺品のことで私どもに不備があり、急ぎやって来た次第です。ご遺品をお渡しそびれたかもしれません。平三郎殿は当夜、傘をご使用でしたでしょうか？」

「さあ、私はそこまでは……」

宇貝家の用人は後方に控えていたもう少し若い家士の方へ首を向ける。

「某も存じません」

「平三郎殿は、帰りは差していましたよ」

ずっと後ろから進み出た一人が声を上げた。

「道場へ来た時のことは知りませんが、帰りは確かに傘を差していました」

道場仲間だという若侍はきっぱりと言いつ切る。

「道場の玄関を出る際、傘を差していく平三郎殿の後ろ姿を見ました。急に雨脚が酷くなった時で、その雨音に吃驚びっくりして玄関を振り返ったので覚えてるんです」

「そうですか。現在、傘は見つかっていないのですが、周辺をもう一度探して、見つけ次第お届けします」

そう言った久馬に用人は首を振った。

「傘は結構です。そちらで処分なさってください」

「差していたとよ！」

門前で待っていた友に駆け寄り、報告する久馬だった。

「そうか、どんな傘だと言っていた？」

「いや、そこまではわからないそうだ。ただ急に雨脚が強くなった時、傘を差して帰

るのを道場仲間が見たと証言している。そういうえば文字梅も昨夜、そんなことを言っていたな。酷く降ってきたとかなんとか。だから襲われたのは俺たちが飲んでいたあの時間だろう——ん？」

「むっ！」

ここで背後に忍び寄る影——

久馬は十手に、浅右衛門は刀の鑢つばに手を置いた。

「失礼、旦那様方——ご報告です。今夜はありません。当御屋敷にてご不幸があったため取りやめですので、ご承知願います。では」

それだけ告げると、人影は駆け去っていく。

「なんだあ、ありゃあ？ 驚かせやがって」

「人違いされたのだろう。俺がこんな格好で門前をうろついていたから、胡乱うらんな浪人と思われたかな。まあ、浪人というのは間違っちゃあいないが——」

ここまで言って浅右衛門は自分の着流しの黒羽二重を繁々と見つめた。やがて唐突に顔を上げる。

「試したいことがある。久さんは、ちよつと何処どこかへ隠れていてくれ。巻羽織まきばおりの旦那がいるより俺一人の方がいい」

「へ？ そりゃ、構わないが」

訝いぶかしがりながらも久馬は言われた通り浅右衛門から離れてやや遠い、道向こうの屋敷の生垣の陰に身を寄せる。すると、浅右衛門は宇貝家の前を行ったり来たりし始めた。ほどなく、正門横の耳門みみかどが開いて、一人の中間ちゆうかんが浅右衛門に近づくと低い声で囁く。

「お知らせします。本日は中止です。宇貝家にご不幸があつて——」

「そいつは残念だ。せつかくやって来たのに。次に楽しませてもらえるのはいつだえ？」

「それはまだちよつと……今ははつきりとは申し上げられません。相すみませんが今日のところはお引き取り願います」

男が屋敷の中へ消えるのを待って、浅右衛門は久馬の傍へ戻ってきた。

「これでわかった。ここ宇貝の屋敷では中間部屋で賭場を開いているようだ」

久馬は舌打ちしただけで別段驚きはしない。大名や旗本が博打ばくちの場所を提供しているのは珍しいことではなかったからだ。賭博は幕府ご禁制だったが町方の奉行所には旗本を取り締まる権限はない。大名、旗本の捜査権を有するのは大目付である。それを利用して胴元たちは大名の下屋敷や旗本の中間部屋で賭場を開くのだ。寺銭てらせんの一部を場所代として上納されるので大名や旗本は潤う。

その種の話の嫌う清廉な同心、黒沼久馬は吐き捨てる。

「ふん、宇貝の屋敷が賭場になつてゐる？ クソ面白くねえがありそうなことだ。だが、それが今回の三男が斬られたこととどう繋がるってんだ？」

「確かにな」

浅右衛門は腕を組んでじつと考え込んだ。

「ここまでの経緯で唯一はつきりしたのは――傘についてだな」

練堀の向こう、高く伸びた椎しんの木を揺らしてモズがピイツと鳴いて飛び立った。浅右衛門が顔を上げる。

「宇貝平三郎は傘を差していた。どうも俺は思うんだが、雨の夜に斬られた他の二人もやはり傘を差していたんじゃないだろうか？」

また久馬が渋い顔をした。

「だがよ、浅さん、博打ばくち同様、傘から殺やられた者の身元や、はたまた下人までを辿るのは無理というものだけ。今日、照降町へ行つてわかつたじゃないか。たとえ傘に何らかの手証があつたとしても、傘つてやつは拾われたり売られたりして……あーっ！」

突然、久馬が叫んだ。

「ど、どうした久さん、驚かすなよ」

「傘といえば、なんてこつた！ あの傘！ 俺が照降町で買った大切な日喜屋の下り傘、あれをさっきの番屋に置いたままだ、どうしよう！」

首打ち人は微苦笑した。

「落ち着けよ、久さん、心配することはねえやな。流石に番屋に置いてある傘を盗とる奴はいないだろう。しかも、新品で包んであるんだ」

「てやんでい！ 番屋だつて安心できるものか。置き傘だと思つて誰かがひよいと差して帰るかもしれないねえ。松兵衛親分だつて言つていたぞ。江戸っ子は落ちてゐる傘を悪気なく拾つて帰る、と。置いてある傘だつておんなじだろうよ」

「置き傘だと思つて……誰かがひよいと？」

浅右衛門の顔が変わつた。もう一度口の中で繰り返す。

「置き傘だと思つて……誰かがひよいと……」

暫しばしく黙つて考え込んでいた浅右衛門が久馬に向き直つた。

「久さん、急いで竹さんのところへ行こう。今一度じっくりと訊きたいことがある」「えー、どつちかってえと俺はキノコより姉のところへ行きてえや。さっきの番屋に寄つて、あの五百文はたいした綺麗な傘を持つてさ」

〈五〉

両国橋の際に位置する米沢町は両国広小路に隣接し、南は薬研堀に面している。現中央区東日本橋二丁目の辺りだ。ある時期の江戸古地図で見ると薬研堀の端に小さく柳橋の名が記されている。神田川に柳橋が架けられると、薬研堀のこの橋は元柳橋と呼ばれるようになったため米沢町の隅田川に沿った通りを元柳橋河岸という。この界限は薬研問屋が多いことでも知られている。

そんな薬種屋の一軒、二階の窓から怪しい呻き声が漏れ聞こえてきた。

「うーん……うーん……」

ここが戯作者見習い朽木思惟竹こと竹太郎の棲家である。一応実家からは独立しての一人住まい。とはいえ、未だ戯作では稼げないので、口では厳しく言うものの松兵衛が滞りがちな部屋賃を払ってやっているとを周りの者は皆知っている。その代わり手数に要する時は目明しである父の捕り物の助っ人をしてというわけだ。

「入るぜ、キノコ……げ？」

その勝手知ったる竹太郎の住まい。久馬は薬種屋の独特の匂いが籠った店舗を突っ切って、階段を上がり、カラリと襖を開ける。

狭い四畳半は一面、散らばった半紙で埋まっていた。

キノコの姿は何処？ 目を凝らすとその半紙の山の下から小粋な本多鬚が見える。

「お、そこか、キノコ！」

引き起こしながら、久馬は真顔で訊いた。

「おめえ、まさか書き損じの半紙で窒息しかけてたんじゃないだろうな？」

「うーん、うーん……俺はもうダメだあ……やっぱ、ダメだああああ！ 書けねえ……どうしても書けねえ……」

「ははあ、例のフラレ侍の戯作か？」

遠慮なく久馬は呵々と笑う。

「案の定、書きあぐねて行き詰まってやがるな！」

ここで漸く我に返ったようで竹太郎は目を瞬いた。

「これはこれは——黒沼の旦那と山田様？ またまたお二人揃って、今日はわっちの晦まで押しかけて一体何の騒ぎです？」

浅右衛門が丁寧に申し出る。

「竹さん、ここはあんたに訊くのが一番だと思つてね。前に言つていたフラレ侍について、今一度詳しく教えてくれないか？　どうも、気にかかることがあつて……」

竹太郎の顔がパツと輝いた。

「天下の首打ち人、山田浅右衛門様に頭を下げられるたあ、この朽木思惟竹一生の名譽。ようがす、お話しいたしましょう！」

大きく頷いた後で、言葉が続ける。

「それにしても、山田様、すこぶる運がよろしいようで。というのも——」

竹太郎が言うには、昨日、大門前の五十間通りの茶屋から飛び出した後、竹太郎はやり方を変えたのだとか。

「遊女じゃあるまいしフラレ侍をただ、待つだけでは埒が明かねえと気づきましたんでさ。それでわっちは足を使つて調べまくつたね」

「吉原の中をかい？　そりや大変だつたらう、竹さん？」

浅右衛門が吃驚して訊く。吉原の管轄は町奉行でも寺社奉行でもない。幕府は、代々その名を継ぐ長吏頭・浅草弾佐衛門なる人物に遊郭内の支配を委ねていた。その上、商売上、どの見世も顧客について口が堅い。

「何ね、そこはそれ、大した難儀はありませんでした」

尻端折りにして、若い衆のふりをしてチヨロチヨロ駆け巡つたと竹太郎は軽く流す。

「その結果、フラレ侍が通っている見世が揚屋町の某廓だと、そこまでは探し出したんでさ。さあ、ここから勝負さね、それでわっちはなげなしの金を……」

「おい！　廓に上がったのか？　まともな働きもない半人前の分際であつて野郎だ！　俺だつて花魁なんぞ手を握つたことすらねえつてのに」

浅右衛門が遮る。

「落ち着け、久さん。そこは大事な部分じゃない」

「山田様の言う通りだ。最後まで聞いてくだせえ、黒沼の日那。わっちが金を渡したのは遊女は遊女でも元遊女。遣り手でさあ」

「あ、遣り手か」

散らばつた半紙の上に四角く座り直す久馬だつた。

〈遣り手〉とは年季が明けた後も遊郭に残り働いている女たちのことである。大多数の遊女たちは（無事生き延びていたなら）遣り手になる。遣り手の仕事は遊女の警固や見張りだ。狼藉を働く悪い客から遊女の身を守るのと同時に、遊女自身が逃亡やズル休みといった悪さをしないか常に目を光らせていた。当然、懲罰も担当した。その他に、客からの口利きや仲介なども請け負つたのである。

卅

「なんだい、これっぽっちの御錢で——」

さて、その遣り手。渡された金から目を上げると竹太郎をじつと見つめて言った。「と、冷たくあしらいたいところだが、イイ男だねえ、あんた。アタシの死んだ情夫に似てる。ちよつと笑つて見せておくれでないか？ そうそう、そつくりだよ！」

ほつれ毛を直しながら、遣り手がホウツとため息をつく。

「つたく、惣吉の野郎、金遣いの荒い、浮気性のつれない男だったのにさ、ニコツと笑う笑顔良しときたもんだ。あたしや何度、喜んで騙されてやったことか」

嚙んだ唇に昔の面影が色濃く匂った。

「悔しいねえ。あんなに尽くしてやったのにあつさり死んじまつてサ。今頃は地獄の釜の前で鬼どもにニコリ笑つてみせてるんじゃないかねえ。鬼どももアタシみたいに絆はだされてくれりゃいいけど……」

小さく首を振ると、遣り手は竹太郎の金を襟元に押し込んだ。

「もう一回、笑つてみせておくれよ。それに免じて、いいよ、請け負つてやるさ。ど

の口に口利きしてもらいたいだえ？」

今一度竹太郎は笑つてみせた。今度は本氣まじの笑顔だ。

「いや、おいらが持つてるのはそれポツキリ。流石に遊女を買う金は持つてねえや。

これはあんたへの駄賃だよ。教えてくれ、姐さん、フラレ侍が通つてるのはこの見世だつてな？ で、鼻屑ひいきにしているのはなんていう子だい？ そして、いつ頃、何回くらいら来た？ 理由わけあつて俺はどうしてもフラレ侍に会いたいだ」

「……モミジね」

卅

「遊女の名はモミジ。部屋持ちの遊女さね」

定廻り同心と首打ち人の顔を交互に見ながら、竹太郎は告げた。

「モミジはその名の通り儂はなげで、今にも枝を離れてハラハラと散りそうな風情がたまらないと中々の人気だそうさ。そして肝心要かなしみのフラレ侍だが、顔を見せたのは今までで二回、どちらも昼見世とのこと」

吉原は昼見世が昼九つ（正午）から昼八つ（十四時）までで、夜見世が暮六つ

(十八時)から夜四つ(二十二時)までとなっていた。大門は夜四つで閉まる。そして暁ハツ(二時)、(大引け)となり拍子木が打ち鳴らされて吉原は眠りにつく……

「昼見世の二回？」

「そりゃ、おまえさんが中々捕まえられないはずだな」

「そうでしょうか? 『フラれていくさ』という粋な台詞のせいで吉原内に噂が広まったが、実際はフラれ侍は二回やって来ただけなんではない。ところが、遣り手と話していた矢先――」

卍

遣り手が竹太郎の袖を引いた。

「来たよ、あれだよ、あれがあんたが会いたがってたフラれ侍さ」

「えっ!」

卍

「――てことは、会ったのかい、竹さん？」

「会いましたとも! わっちの熱意が天に届いたか、この日は夜見世が始まったばかりの時刻だというのにフラれ侍がやって来た! これが噂通りだったねえ! 爽やかなイイ男さね。上背があつて、切れ長の涼しい目。麻ちぢみの着流しに三本独鈷の角帯をキリリと締めて……そうそう、やつぱり小脇に傘を挟んだ!」

竹太郎はピシヤリと額を叩いて続ける。

「俺は江戸っ子、野暮じゃねえ。フラれ侍が中に入ってから、見世の前でじつくり待ったね。小半刻経つたらうか? 夏の夜が暮れかけた頃、出て来たところで声をかけた」

ここで、竹太郎はガクリと首を折った。

「でも、ダメだった――」

卍

「お待ちください、お侍様。あなたが最近吉原で噂のフラれ侍さんですか? 私はしない戯作者けきさくしゃでして、あなたについて書きたいんです。絶対傑作にする自信がある。